和歌山県立和歌山盲学校

研修部だより

第11号
令和5年度
2月2日

紀北支援学校　自立活動研究発表会

生活に生きる自立活動
ー　般化の視点を踏まえて考える　ー

1月23日(火)、和歌山県立紀北支援学校にて研究発表会が開催されました。全校児童生徒約300名。今年度創立50周年を迎えたそうです。以下、参加した岩橋先生からの報告です。

公開授業

小学部・中学部・高等部の知的障害学級の自立活動の授業及び、小学部肢体不自由重複学級と愛徳分教室小学部肢体不自由重複学級の授業(ビデオ)が公開されていました。

自立活動学習指導案には児童生徒の実態や本時の目標はもちろんですが、「1年後のイメージする姿」「指導目標」「活動内容設定の理由」「今までの評価(前時の評価と反省、日常生活や各教科等の中での評価)」がしっかりと記載されていました。学習指導案を基にして授業改善や授業を担当している先生以外の先生方と情報共有し、一貫した対応のできるチーム作りをしているそうです。

研究報告(自立活動部の報告より引用抜粋)

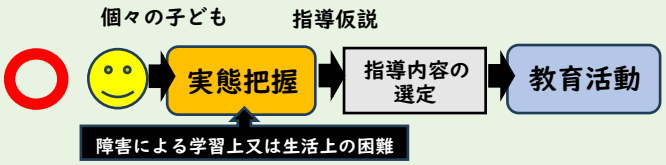
紀北支援学校は自校の特色として「自立活動の指導」を挙げています。令和4～5年度の2年間「生活に生きる自立活動」～般化の視点を踏まえて考える～を研究テーマに取り組みました。学年集団を基本とした21グループに分かれ、月1回の研修を行いました。その中から7グループが公開授業を行いました。

「般化」とは、学習によって習得したことが、その具体対象を離れ、法則となって定着することです。学習転移のときの重要な条件の一つとされます。

本研究における般化とは、子どもが自立活動の時間で「障害による学習上又は生活上の困難」を改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を身につけ、各教科等や日常生活の中でそれらを使うことができることです。自立活動の時間内の「～できる」で完結せず、家庭や他の授業の姿を想像することが大切です。

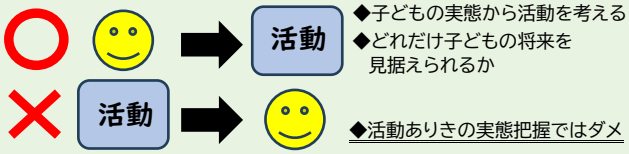
研究総括(和歌山大学名誉教授　武田鉄郎先生の資料より引用抜粋)

▼実態把握の考え方



※各教科は教育活動が決まっているが、自立活動は児童生徒の実態把握をしてから指導内容の選定をし、教育活動を考える必要がある。これができるのが、特別支援に携わる教員の“専門性”である。

▼自立活動の指導の視座



▼指導目標の明確化の必要性

×人とのかかわりを楽しむ
→人とのかかわりを楽しむことを通して、情緒の安定を図る。
×好きなことに集中して取り組む
→好きなことに集中して取り組むことで、学習上の困難を改善する意欲の向上を図る。
※「ねらい」を明確化することで、評価が明確になる。

▼評価の視点

外的規準(教師による評価)だけでなく、内的規準(児童生徒自身が行う評価:発言やノート・ワークシートの記述)も重要。

▼特に障害の重い子どもにとって分かりやすい予告(声かけ＋タッチキュー)の受信で、子どもの主体的な発信につなげる

※タッチキュー(Touch Cue)とは、子どもの身体に特別な触り方をして、「だれがいるのか」、「次に何が起きるのか」を伝える方法。予告や情報を子どもに提供するばかりでなく、係わり手が子どもにして欲しいことを、直接身体に知らせたり、促したりすることもできる。

▼ICF の背景因子である環境因子において、ICT 端末の活用で可能性を広げる。

▼ダイナミックアセスメント(即時評価→即時指導→即時評価→即時指導・・・の連続)を重視し、子どもに寄り添いながら行った授業であれば、たとえ「見栄えの悪い授業(へたくそな授業とは違います)」であってもよい授業であると言える。